

大学生の進路希望と心理学に対する期待及び 心理学専攻志望動機の関連

藤井 あゆみ ・ 谷 渕 真 也

比治山大学大学院現代文化研究科附属
心理相談センター紀要 第11号(2015年)別刷

大学生の進路希望と心理学に対する期待及び 心理学専攻志望動機の関連

藤井 あゆみ・谷 潤 真 也

Relationships between attitude on career and the expectation of studying
psychology and its Motivation.

Ayumi FUJII and Shinya TANIBUCHI

【要 旨】本研究では、心理学専攻の大学生の進路希望と心理学に対する期待および専攻志望動機との関連を明らかにすることを目的とした。心理学を専攻する大学1年生から3年生151名を対象に質問紙調査を実施した。判別分析の結果、入学時の希望進路で「進学」を選択した者ほど、心理学に対する期待の「資格に関する項目」、「自己に関する項目」の得点が高いほど、現在の希望進路として「進学」を選択することが明らかになった。また、専攻志望動機についてクラスタ分析を行ったところ、動機の3因子の特徴から3つのクラスタに分かれ、クラスタ1とクラスタ3が「進学」を希望する割合が高いことが明らかになった。クラスタごとの特徴から、同じ「進学」を希望している者でも専攻志望動機の様相が異なることが明らかになった。

【キーワード】進路希望 Attitude on career, 心理学に対する期待 Expectation of studying psychology, 心理学専攻志望動機 motivation of studying psychology

問題

大学生にとって卒業後の進路の決定は重要な課題であり、これを促進するために進路選択に関する意識を明らかにすることが求められている(杉本, 2012)。

本研究の対象となった心理学を専攻する学生の進路選択には、以下のような特徴がある。まず、文系の学部・学科ではあるが、一般就職のほか臨床心理士の資格取得や福祉系の資格取得などを志向したり、対人援助専門職への就職を志望する者がいる。特に、臨床心理士については学部入学前から志望し、それが学部・学科の選択動機となっている場合も少なくない。臨床心理士資格の取得を目指す場合には、財団法人臨床心理士資格認定協会の指定大学院を修了する必要があるが、大学院進学を考慮した進路決定をすることが求められる。

一般に、大学入学時に卒業後の進路として大学院進学を希望している者は多いが、大学で心理学を学び、学年が上がるにつれてその数は減少すると考えられる。

例えば渡邊(2003)は、心理学専攻の大学生の進路に関する意識の変化について、入学から卒業に至るまでの4年間のプロセスを追って検討した。1998年度臨床心理学科に入学した大学生68名を対象に質問紙調査を実施した結果、1年次に「大学院進学」を希望していた者は72%を超えていたが、4年次では33%まで減少していた。ただし、3年次で一旦20%まで減り、4年次では再び進学希望者が増えていた。また、進路希望の決定程度では、2年次で既に9割の学生が「ある程度」あるいは「決めている」と回答しており、このことから、1年次で臨床心理士等へのあこがれや理想があり、2年次で自己の能力・適性のある程度自覚し、3年次に現実にそれを職業とする場合の難しさを知り、方向転換せざるを得なくなったことが示唆された。

心理学専攻の学部・学科および大学院を志望する動機や理由についてはいくつかの研究がある。例えば、馬場(1998)は、臨床心理学の授業を受講する学部

生と接した経験から、自分自身の不安や葛藤について関心があり、またそうした自分への関心や疑問に対する回答を求めて、授業を選択する者が多いことを指摘している。また、カウンセラー志望者の特徴として、自分の課題を解決するのではなく、自己感覚の不確かさや自信の無さをカバーするためにカウンセラーになろうとする者がいると述べている。

また、谷口・金綱(2012)は、学部・大学院で心理学を専攻した動機とその達成プロセスについて検討するため、近畿圏私立四年制大学の心理学を専攻する学生135名、及び心理学を専攻していない学生52名を対象に質問紙調査を行った。その結果、心理学を専攻する学生は心理学を専攻していない学生に比べて、「心理学系の資格が手に入る」という資格取得に関する期待が高かった。また、統計的な有意差は認められなかったが、「自分の悩みを解決できる」などの「自己に関する項目」や「社会や組織でうまくやっっていける」などの「他者に関する項目」に関する期待が相対的に高いことを明らかにした。さらに谷口・金綱(2012)は、関西圏私立四年制大学の心理学を専攻する学部の学生と研究科の学生12名、及び心理学を専攻していない学部の学生と研究科の学生8名を対象に半構造化面接を実施した。その結果、心理学を専攻する学生は、「自分の悩みが解決できる」、「自己理解のため」、「楽しいから」、「辛い経験への対処」などの内的な動機が強く、心理学を学ぶことでその動機が達成されていくことを明らかにした。

カウンセラー志望者の動機に関する調査では、塩尻・福田(2005)が、山口大学教育学部生・大学院生147名を対象に質問紙調査を実施し、カウンセラー志望者の志望動機を自我同一性及び過去経験の側面から検討している。その結果、カウンセラー志望の動機として、「人の心に興味がある」や「憧れている」という「他者探求的動機」、「やりがいがある」や「子どもと触れ合いたい」という「外的利得動機」、「人の役に立ちたい」や「自分の経験を活かしたい」という「自己投入的動機」、「自分の問題を解決したい」や「面白そう」という「内的利得動機」の4つを抽出された。また、カウンセラーを志望する者の中で自我同一性の獲得にばらつきがあり、志望動機には、自我同一性や過去の経験が関連していることが示された。

心理以外の対人援助職の養成課程に関する研究の中で、立脇(2008)は、介護福祉士の養成過程について、介護福祉士に興味を抱き始めた契機から、養成校

受験に至るまでの意識形成過程を明らかにした。短期大学系の介護福祉士養成校の在学学生61名を対象に質問紙調査を行った結果、介護福祉に興味を持った契機については、「高齢者が身近にいた」、「ボランティア体験」という項目の得点が高かった。また、介護福祉士養成校を受験しようとした動機については、「介護福祉士資格が取得できるから」、次いで「将来家族の介護に役立つから」、「人の役に立ちたいと思ったから」という項目の得点が高かった。このことから、個人の家庭環境や、中・高等学校での福祉に関する知識・体験、保護者の職業意識、進路を意識した時代背景などの外的環境因子が意識形成の基礎となっていた。また、養成校受験の動機については、介護職に対し「やりがい」を迫り、資格を取得して他者の役に立ちたいという動機が検出できた。

以上のように従来の研究では、すでに学部や大学院に入学した学生を対象に入学の動機やその専門分野を学ぶことの動機を検討した者が多い。しかし、学部と大学院の2つのステップを経て資格取得を目指す臨床心理士に関する進路決定を考える場合、学部入学の動機および現在心理学を学んでいる中での心理学に対する期待と進路希望との関連を検討する必要がある。

そこで、本研究では、心理学を専攻する大学生を対象に、大学卒業後の進路希望と心理学に対する期待および心理学専攻を志望した動機との関連を明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象者

心理学を専攻する大学1年生から3年生151名を対象とした。

調査時期

2014年11月に調査を実施した。

調査手続き

授業中に質問紙を配布し、集合調査法でその場で実施して回収した。

質問項目

質問項目は以下の通りであった。

(1)入学時の希望進路

入学当時に希望していた進路について、「1. 進学」、「2. 就職」、「3. その他」からひとつを選んで回答してもらった。

(2)現在の希望進路

調査時点に希望していた進路について、「1. 進

Table 1 学年と入学時の進路希望および現在の進路希望の変化のクロス集計

	学年	学年			
		1年 (%)	2年 (%)	3年 (%)	合計 (%)
進学-進学	人数	14 (26.4%)	7 (16.3%)	6 (13.9%)	27 (19.4%)
進学-就職		14 (26.4%)	11 (25.6%)	8 (18.6%)	33 (23.7%)
就職-就職		23 (43.4%)	25 (58.1%)	27 (62.8%)	75 (54.0%)
就職-進学		2 (3.7%)	0 (0%)	2 (4.7%)	4 (2.9%)
合計		53 (100%)	43 (100%)	43 (100%)	139 (100%)

学”，“2. 就職”，“3. その他” からひとつを選んで回答してもらった。

(3)心理学に対する期待

心理学を学ぶことによってどのような変化が起こることを期待するかについて、谷口・金網（2012）の「心理学に対する期待」尺度を用いて尋ねた。“自分の悩みを解決できる”，“自分の可能性に気が付ける”など「自己に関する項目」因子5項目，“他人の考え方や性格が分かる”，“他人とうまく付き合える”など「他者に関する項目」因子5項目，“子どもの知的能力を育てる”など「子どもの養育に関する項目」因子2項目，“人間に対する理解が深まる”，“学習や記憶が容易になる”など「人間全般に関する項目」因子3項目，“心理学関係の資格が手に入る”の「資格に関する項目」因子1項目，“特に何も期待していない”の「その他項目」因子1項目，計17項目を使用した。“1. あてはまらない”から“5. あてはまる”の5件法で回答してもらった。

(4)心理学専攻志望動機

心理学専攻を志望した動機について尋ねた。尺度は、塩尻・福田（2005）の「カウンセラー志望の動機に関する選択肢」尺度を改変して用いた。具体的には、教示をカウンセラー志望の動機から心理学専攻を志望した動機へ改変した。20項目について，“1. あてはまらない”から“5. あてはまる”の5件法で回答してもらった。

(5)属性

学年，性別を尋ねた。

結果

1. 有効回答者

回収した151名の全てを分析に用いた。有効回答率は88.7%であった。回答者の内訳は，1年生61名（男性29名，女性32名），2年生45名（男性22名，女性23名），3年生45名（男性20名，女性25名）であった。

2. 参加者の進路希望の特徴

入学時の希望進路の学年別内訳は以下の通りであった。まず、「進学」と回答した者は，1年生で31名（1年生全体の50.8%），2年生で18名（40.0%），3年生で14名（31.1%），全体で63名（41.7%）であった。次に、「就職」と回答した者は，1年生で28名（45.9%），2年生で26名（57.8%），3年生で29名（64.4%），全体で83名（55.0%）であった。最後に，「その他」と回答した者は，1年生で2名（3.3%），2年生で1名（2.2%），3年生で2名（4.4%），全体で5名（3.3%）であった。

現在の希望進路の学年別内訳は以下の通りであった。まず，1年生では，「進学」と回答した者が16名（27.1%），「就職」と回答した者が37名（62.7%），「その他」と回答した者は6名（10.2%）であった。2年生では，「進学」と回答した者が7名（15.6%），「就職」と回答した者が37名（82.2%），「その他」と回答した者が1名（2.2%）であった。3年生では，「進学」と回答した者が8名（17.8%），「就職」と回答した者が36名（80.0%），「その他」と回答した者が1名（2.2%）であった。未記入の者が2名であった。

入学時の希望進路，現在の希望進路とも「その他」と回答した者はごく少数であった。そのため，以降の分析には「進学」，「就職」と回答した者のみのデータを用いた。

入学時の希望進路と現在の希望進路の変化について検討するため，入学時の希望進路，現在の希望進路とも「進学」と回答した者を「進学 - 進学」群，入学時の希望進路を「進学」，現在の希望進路を「就職」と回答した者を「進学 - 就職」群，入学時の希望進路「就職」，現在の希望進路を「進学」と回答した者を「就職 - 進学」群，入学時の希望進路，現在の希望進路とも「就職」と回答した者を「就職 - 就職」群として，各群の人数を集計した。その学年別内訳は以下の通りであった（Table 1）。まず，「進学 - 進学」群は1年生14名（26.4%），2年生7名（16.3%），3年生6

Table 2 心理学専攻志望動機因子分析結果

	因子1	因子2	因子3
1. なんとなく	-.922	.229	.017
15. 憧れている	.496	.338	-.040
5. 自分の経験を活かしたい	.053	.762	-.091
13. 社会的に認められているから	-.214	.594	.055
6. 人の役に立ちたい	.238	.420	.122
4. やりがいがある	.353	.418	.051
17. 人の世話が得意	.098	-.105	.802
18. 子どもと触れ合いしたい	-.128	.150	.643
	1	2	3
因子間相関	1	—	.283
	2	—	.476

名 (13.9%), 計27名 (19.4%) であった。「進学 - 就職」群は1年生14名 (26.4%), 2年生11名 (25.6%), 3年生8名 (18.6%), 計33名 (23.7%) であった。「就職 - 就職」群は1年生23名 (43.4%), 2年生25名 (58.1%), 3年生27名 (62.8%), 計75名 (54.0%) であった。「就職 - 進学」群は1年生2名 (3.8%), 2年生0名 (0%), 3年生2名 (4.7%), 計4名 (2.9%) であった。

3. 心理学専攻志望動機の因子分析

心理学専攻志望動機の因子構造を検討するため、因子分析を行った。

(1)項目分析 心理学専攻志望動機尺度の全20項目について、天井効果 (平均値 + 標準偏差) と床効果 (平均値 - 標準偏差) の検討を行った。その結果、項目3, 8で天井効果がみられ、項目2, 9, 10, 12で床効果がみられた。そのため、以降の分析から除外した。(2)探索的因子分析 上記の6項目を除いた14項目について、最尤法による探索的因子分析を行った。まず、回転のない因子分析を行い、スクリープロットの特徴と解釈可能性から3因子を採用した。次に、プロマックス回転による因子分析を行い、因子負荷量がいずれの因子にも0.40に満たない項目および複数の因子に0.40以上の負荷量を示した項目を削除し、再度分析を行った。その結果、3因子8項目が採用された。3因子の累積寄与率は50.89%であった (Table 2)。

第1因子には“なんとなく (逆転項目)”, “憧れている”といった漠然とした心理学への興味を示す項目が高い負荷量を示していた。そこで第1因子を「漠然とした興味」因子と命名した。第2因子には“自分の経験を活かしたい”, “社会的に認められているから”, “人の役に立ちたい”といった人を支援することを志向する項目が高い負荷量を示していた。そこで

第2因子を「支援志向」因子と命名した。第3因子には“人の世話が得意”, “子どもと触れ合いしたい”といった人とのふれあいに関する項目が高い負荷量を示していた。そこで第3因子を「ふれあい」因子と命名した。

4. 尺度の信頼性の検討

心理学に対する期待尺度および心理学専攻志望動機尺度の各因子の項目について信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、心理学に対する期待尺度では、「自己に関する項目」が $\alpha = .79$, 「他者に関する項目」が $\alpha = .76$, 「養育に関する項目」が $\alpha = .81$ であり、いずれも $\alpha = .75$ 以上で十分な信頼性が得られた。「人間全般に関する項目」は $\alpha = .54$ で、十分な信頼性が得られなかったため分析から除外した。

心理学専攻志望動機尺度では、「漠然とした興味」因子が $\alpha = .70$, 「支援志向」因子が $\alpha = .73$ で十分な信頼性が得られた。「ふれあい」因子は $\alpha = .69$ でやや信頼性が低かったが、心理学を専攻する動機として重要な要因の一つであると考えられたため以降の分析に用いた。

5. 現在の希望進路に関連する要因の検討

現在の希望進路に関連する要因を検討するため、心理学に対する期待尺度および心理学専攻志望動機の各因子得点、入学時の希望進路 (進学・就職) を独立変数、現在の希望進路 (進学・就職) を従属変数とする判別分析を行った。独立変数の投入はステップワイズ法で行った。その結果、現在の希望進路 (進学・就職) の2群間の判別に際し、各独立変数の標準化された正準判別関数係数は、寄与の大きい項目順に、入学時の希望進路で-.76, 期待の「資格に関する項目」で.40, 期待の「自己に関する項目」で.37であった。Wilksのラムダは.69 ($p < .001$), 判別率中率は76.6%であり、上記3つの独立変数で現在の希望進路を有意に判別できた。すなわち、入学時の希望進路で「進学」を選択した者ほど、また、心理学に対する期待の「資格に関する項目」, 「自己に関する項目」の得点が高いほど、現在の希望進路として「進学」を選択していたことが明らかになった。

6. 調査参加者の心理学専攻志望動機の特徴の検討

調査参加者の心理学専攻志望動機のパターンを検討するため、「漠然とした興味」因子, 「支援志向」因子, 「ふれあい」因子についてクラスタ分析 (Word法) を行った。その結果、3クラスタが抽出された。各クラ

Table 3 心理学専攻志望動機と各クラスターの分散分析結果

心理学専攻志望動機尺度因子	クラスター	M	SD	F値	多重比較
漠然とした興味	1	3.41	0.85	176.17	2 < 1***
	2	1.87	0.69		1 < 3***
	3	4.46	0.43		2 < 3***
支援志向	1	3.20	0.75	37.96	2 < 1***
	2	2.52	0.83		1 < 3**
	3	3.79	0.49		2 < 3***
ふれあい	1	1.73	0.64	39.75	1 < 2***
	2	2.73	1.15		1 < 3***
	3	3.46	0.82		2 < 3***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

スタの特徴を検討するため、クラスターを独立変数、心理学専攻志望動機尺度の各因子得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った (Table 3)。その結果、全ての因子で有意差が見られた。多重比較 (Tukey HSD) を行った結果、「漠然とした興味」因子では、クラスター3がクラスター1および2に比べて得点が高く、クラスター1がクラスター2に比べて得点が高かった ($F(2,148) = 176.17, p < .01$)。次に、「支援志向」因子では、クラスター3がクラスター1および2に比べて得点が高く、クラスター1がクラスター2に比べて得点が高かった ($F(2,148) = 37.96, p < .01$)。最後に、「ふれあい」因子では、クラスター3がクラスター1および2に比べて得点が高く、クラスター2がクラスター1に比べて得点が高かった ($F(2,148) = 39.75, p < .01$)。すなわち、クラスター1は「漠然とした興味」因子と「支援志向」因子が中程度、「ふれあい」因子が低かった。クラスター

2は「漠然とした興味」因子と「支援志向」因子が低く、「ふれあい」因子が中程度であった。クラスター3は「漠然とした興味」因子、「支援志向」因子、「ふれあい」因子がいずれも高かった (Figure1)。

7. 心理学専攻志望動機と心理学に対する期待の関連

心理学専攻志望動機のパターンと心理学に対する期待との関連を検討するため、クラスターを独立変数、心理学に対する期待の各因子得点を従属変数とする一元配置分散分析を行った。その結果、「自己に関する項目」 ($F(2,148) = 12.47, p < .001$)、「養育に関する項目」 ($F(2,148) = 4.49, p < .01$)、「人間全般に関する項目」 ($F(2,148) = 7.89, p < .01$) について有意差が見られた (Table 4)。次に、「養育に関する項目」では、クラスター3がクラスター1および2に比べて得点が高く、クラスター2がクラスター1に比べて得点が高かった ($F(2,148) = 4.94, p < .01$)。次に、「人間全般に関

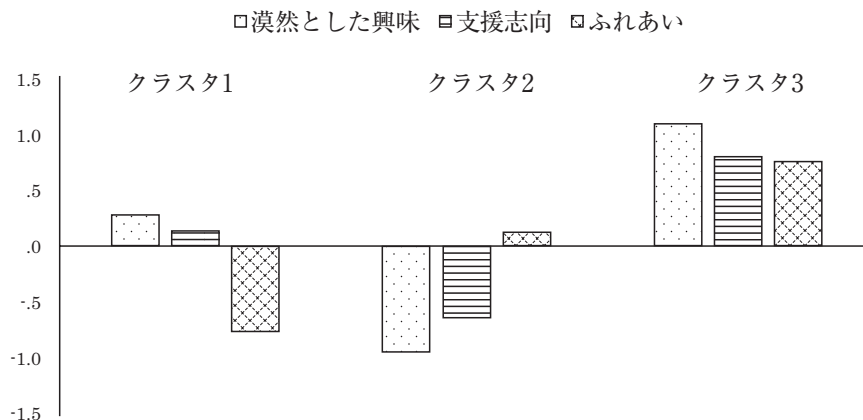


Figure1 心理学専攻志望動機のクラスターごとの特徴

Table 4 心理学に対する期待と各クラスタの分散分析結果

心理学に対する期待尺度因子	クラスタ	M	SD	F値	多重比較
自己に関する項目	1	3.32	0.78	12.47	2 < 1*
	2	2.98	0.71		1 < 3*
	3	3.72	0.69		2 < 3***
養育に関する項目	1	2.69	1.00	4.94	1 < 2
	2	3.03	1.05		1 < 3**
	3	3.38	1.00		2 < 3
人間全般に関する項目	1	9.67	2.21	7.89	2 < 1
	2	9.42	1.87		1 < 3**
	3	11.00	1.95		2 < 3**

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

する項目」では、クラスタ3がクラスタ1および2に比べて得点が高く、クラスタ1がクラスタ2に比べて得点が高かった ($F(2,147) = 7.89, p < .01$)。

8. 心理学専攻志望動機と現在の希望進路の関連の検討

心理学専攻志望動機のパターンと現在の希望進路との関連を検討するため、クラスタごとの現在の希望進路(進学・就職)について χ^2 検定を行った。その結果、回答の割合に有意差があった。残差分析の結果、クラスタ1および3では「進学」と回答した者が多く、クラスタ2では「就職」と回答した者が多かった($\chi^2(2) = 12.17, p < .01$)。多重比較(Tukey,HSD)を行った結果、「自己に関する項目」では、クラスタ3がクラスタ1および2に比べて得点が高く、クラスタ1がクラスタ2に比べて得点が高かった($F(2,148) = 12.47, p < .001$)。

考察

本研究では、心理学を専攻する大学生を対象に、大学卒業後の進路希望と心理学に対する期待および心理学専攻を志望した動機との関連を明らかにすることを目的とした。

1. 調査対象者の希望進路の特徴

はじめに、本研究の調査対象者の希望進路の特徴について考察する。本研究では、いずれの学年でも、入学時の希望進路が「進学」の者が31%~51%であり、現在の希望進路はそれよりも少ない16%~27%であった。学部生の希望進路の経年変化を検討した渡邊(2003)では、1年次入学当初は大学院進学を希望する者が72%を越えていたが、3年次で一旦減少し、最終的に4年次では男女平均で33%まで減少していた。入学時から大学院進学希望者が減少するという傾向は

類似していた。ただし、進学希望者の割合は本研究の対象者のほうが少なかった。学部で臨床心理士養成をどの程度意識したカリキュラムを組んでいるかなど大学の特性による違いがあると考えられる。

2. 現在の希望進路に関連する要因

次に、現在の希望進路(進学・就職)の選択に関連する要因について考察を行う。本研究では、入学時の希望進路で「進学」を選択した者ほど、また、心理学に対する期待の「資格に関する項目」、「自己に関する項目」の得点が高いほど、現在の希望進路として「進学」を選択していたことが明らかになった。まず、入学時に「進学」を希望する者が、現在も「進学」を希望していた。本研究で入学時の希望進路と現在の希望進路の変化について検討したところ、入学時から就職を希望して現在も就職を希望していると回答した者が54%と最も多く、次に、入学時に進学を希望して現在は就職希望と回答した者、入学時も現在も進学希望と回答した者と続き、入学時に就職を希望して現在進学を希望している者は2.9%で極めて少なかった。このことから、大学院進学をするかどうかは入学時に決まっており、入学後に進学希望に変化する者は極めて少ないと考えられる。

希望進路と心理学に対する期待との関連について検討した研究は見当たらないが、谷口・金綱(2012)は、面接調査から心理学を専攻する大学生と大学院生のみ「内的なもののため」という動機を見出している。この「内的なもののため」とは、具体的には“CLの話聞くことが自分にとってプラスになる、成長、発見できるのが魅力である”などの回答であり、て、“自己の感情・感覚を専攻する学問によって発展/解消しようとするもの”と定義されている。これは、

本研究の「自己に関する項目」とある程度一致していると言える。したがって、心理学を学ぶことによって自分の悩みや問題を理解し解決できるだろうという期待が高まることで、進学への意欲も高まると考えられる。

また、資格を取得できることは臨床心理士養成大学院に進学する最大の理由であると考えられ、心理学の資格を取得できるという期待が進学希望と関連する結果になったと考えられる。一方、谷口・金網（2012）の心理学に対する期待のうち、「社会や組織でうまくやっけていける」などの「他者に関する項目」は進学希望と関連していなかった。馬場（1998）の指摘する通り、臨床心理学の授業の選択やカウンセラーの志望には自己理解や自分の悩み・問題の解決に関する期待が関連していると考えられる。

3. 心理学専攻志望動機の捉え方のパターンと心理学に対する期待の関連

次に、本研究の参加者の心理学専攻を志望した動機のパターンについて考察する。本研究では、専攻志望動機の「漠然とした興味」、「支援志向」、「ふれあい」の3因子について調査対象者が3つのクラスタに分類された。そのうちクラスタ3は、他のクラスタに比べて3因子の全ての動機が高かった。また、心理学に対する期待についてもクラスタ3の者は「自己に関する項目」、「人間全般に関する項目」、「養育に関する項目」の全ての期待が高かった。このことから、自己や人間に関して理解を深めたり、他者を支援することを志向したり、心理学を自分の子どもの養育や一般的な人間関係に役立てることを強く期待し、心理学を学びたいと強く動機づけられている者であると考えられる。次に、クラスタ2は、クラスタ1に比べて、人とのふれあいや子どもとのふれあいへの関心を示す「ふれあい」因子が高く、自分や人間に関する理解を深めたいという「漠然とした興味」や他者を支援したり助けたいという「支援志向」が低かった。またクラスタごとの心理学に対する期待の違いを検討した分析では、クラスタ2の者がクラスタ1の者に比べて「養育に関する項目」の得点が高く、心理学を学ぶことで子育てがうまくできるようになることを期待していることが明らかになった。このことから、心理学を自分の日常生活や今後の子育てに役立てたいという動機を持った者であると考えられる。最後に、クラスタ1は、クラスタ2に比べて、他者を支援したいという動機が強く、自分の生活に生かしたいという動機が低

かった。また期待に関する分析では、クラスタ2に比べて自分や人間全体のことに理解を深めたいという期待が高かった。このことから、クラスタ2と比べると自分の悩みの解決や人間理解が進むことを期待し、対人援助に関する動機が高い者たちであると考えられる。

4. 現在の希望進路と各クラスタとの関連

次に、心理学専攻志望動機のパターンと現在の希望進路との関連について考察する。本研究では、クラスタ1および3で「就職」より「進学」を希望している者が多かった。ただし、クラスタ3のほうが動機および期待の得点が高かった。塩尻・福田（2005）の指摘した通り、同じカウンセラー志望者でも志望動機にはばらつきがあり、その背景には自我同一性の獲得の程度や過去の経験が関連していると考えられる。また、クラスタ2では「進学」より「就職」を希望している者が多かった。クラスタ2は人や子どもとふれあいたいという動機を持っているものの、他者を支援したいという動機は低い者である。馬場（1998）や谷口・金網（2012）はカウンセラー志望者が自己理解や自分の悩みの解決などを志向していると指摘しているが、他者の支援を志向する動機も大学院進学ひいては臨床心理士志望に影響している可能性がある。

5. 今後の課題

最後に、今後の課題について述べる。第1に、縦断的調査の必要がある。本研究では、後期の中盤の11月に調査を実施した。今後は1年次4月から調査を行って経年変化を含めて動機および期待と希望進路の関係を検討する必要がある。第2に、本研究では心理学を学ぶことによって動機がどのように達成されたか、あるいは期待がどのように変化したかについては検討出来なかった。今後は面接調査を行うなど、個人の内的な変化に焦点を当てた分析を行い、個人の内的な変化のプロセスを明らかにする必要がある。

引用文献

- 馬場 禮子（1998）. カウンセラー志望者と自己形成現代のエスプリ 372, 50-55.
 立脇 一美（2008）. 「介護福祉」への興味から養成校受験に至るまでの意識形成過程 — 介護福祉士養成校学生アンケートからの分析 — 聖泉論叢, 16, 177-196.
 谷口 真起子・金網 知征（2012）. 心理学に対する期待及び大学の専攻動機の変化過程に関する調査研

- 究 聖泉論叢, 20, 1-10.
- 杉本 英晴 (2012). 大学生の就職に対するイメージの構造 キャリア教育研, 31, 15-25.
- 塩尻 智也・福田 廣 (2005). カウンセラー志望者の志望動機について —自我同一性, 過去経験及び
- 進路選択からの分析— 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 19, 103-109.
- 渡邊 忠 (2003). 大学生の進路意識の経年変化に関する調査研究(1) —1998年度臨床心理学科入学生について— 人間科学研究, 25, 1-12.